

米陸軍、共同演習で中距離ミサイルを日本展開

中国は断固反対、ロシアも批難—それが抑止に

樋 口 譲 次

○「レゾリュート・ドラゴン 25」で米陸軍の中距離ミサイルを日本展開

日米同盟の抑止力・対処力をさらに強化する一環として、陸上自衛隊と米海兵隊の実働訓練「レゾリュート・ドラゴン 25」が北海道から沖縄を舞台に、9月11日から同月25日までの予定で始まった。

本訓練には、日米の陸海空部隊も参加しているが、中でも米陸軍の第3マルチドメイン任務部隊（MDTF）が「タイフオン（Typhon）」と呼ばれる、対艦・対地攻撃用の中距離ミサイルを初めて日本に展開する。

このことに、内外の関心が集まっているが、国際秩序の「混乱の枢軸（axis of upheaval）」と名指しされる中国とロシアが、早速反対・批難の声を上げた。

特に、中国外務省の郭嘉昆報道官は「中国は一貫して、アメリカがアジア諸国に中距離ミサイルシステムのタイフオンを展開することに断固として反対している」と声高に自国の立場を主張した。

中国が中距離ミサイルシステムの日本展開に断固反対する理由は、同ミサイルが中国に対し大きな脅威となると認識しているからに他ならない。

では、本システムは、どのような能力を有しているのだろうか。

○米陸軍の中距離ミサイルシステム開発

米陸軍では、当該ミサイルシステムを正式には中距離能力（MRC：Mid-Range Capability）あるいは戦略中距離火力（SMRF：Strategic Mid-Range Fires）と呼び、「タイフオン（Typhon）」ミサイルシステムとしても知られている。

この際、中距離は、「中距離核戦力（INF）全廃条約」で規定された500 km～5500 kmを指していると解釈される。

米ソは、東西冷戦末期の1987年に同条約を締結し、中距離弾道ミサイルの全廃を約束した。この条約には、地上発射型の弾道ミサイル及び巡航ミサイルを禁止する内容が盛り込まれていた。

しかし、ソ連の後継であるロシアの同条約違反が明らかになったことから、米国は同条約を破棄し、その後、失効したため、地上発射型ミサイルの開発が可能となった。

ロシアのウクライナ侵攻などに見られるように、ロシアと中国の中・長距離ミサイルシ

システムの改良や無人航空機（UAV）などの普及により、両国の兵器システムが米国の作戦戦闘に及ぼす影響に対する懸念が、弥が上にも高まっている。

これを受け、米陸軍は、既存の砲兵システムとミサイルシステムの改修、新たな長距離システム（極超音速兵器を含む）の開発、既存の空中発射型および海上発射型ミサイルの地上発射型への改修などを通じて、いわゆる長距離精密射撃（LRPF : long-range precision fires）の能力の向上を目指している。

その LRPF 近代化ポートフォリオの一部が、MRC（SMRF）である。MRC は、海軍 SM-6 ミサイルと、地上発射用に改造された UGM-109 トマホーク巡航ミサイルを改修した地上発射型の中距離ミサイルで、射程約 1800 kmといわれる。

このほか、米陸軍は、射程 500 km～650 km（1000 kmへの延伸計画あり）の精密打撃ミサイル（PrSM : Precision Strike Missile）や射程約 2800 kmの長距離極超音速兵器（LRHW : Long-Range Hypersonic Weapon）などを開発しており、MRC は両システム射程間の標的を攻撃することを目指している。

米陸軍の MDTF は、マルチドメイン効果大隊（MDEB）、長距離火力大隊（LRFB）、統合火力防護能力（防空砲兵）大隊（IFPC）および旅団支援大隊（BSB）から構成される。

MRC は、LRFB の下で、長距離極超音速兵器（LRHW）中隊および高機動ロケット砲システム（HIMARS）中隊と並んで MRC（SMRF）中隊として編成されている。

○インド太平洋を重視する米陸軍の MDTF 配置・運用

米陸軍は、MDTF を「あらゆる領域における敵の接近阻止／領域拒否（A2/AD）ネットワークに対して、あらゆる領域で精密効果と精密射撃を同期させるように設計された戦域レベルの機動要素」とし、「統合部隊が作戦計画を実行できるようにする」と説明して統合作戦の一環に位置付けている。中国軍の海洋進出を焦点に、それを阻止するのが主眼であるのは明らかだ。

米国議会調査局「陸軍の MDTF」（2025 年 7 月 2 日更新）によると、その配置・運用は次のようになっている。

- ・第 1MDTF : ワシントン州ルイス・マコード統合基地に本部を置き、米太平洋陸軍に所属している。
- ・第 2MDTF : ドイツに駐留し、米陸軍の欧州を重点に、アフリカ部隊も支援する。
- ・第 3MDTF : ハワイ州スコフィールド兵舎で編成し、米インド太平洋軍の一員として太平洋陸軍を支援する。
- ・第 4MDTF : コロラド州フォートカーソンに駐留し、インド太平洋戦域に重点を置き、2027 会計年度までに完全運用される予定である。
- ・第 5MDTF : ノースカロライナ州フォートブラッグに駐留し、2028 年度までに完全運用

を開始する予定で、指定された地域に集中的に活動する。

MDTFは米陸軍の「近代化の目玉」であり、前記の通り、5個のMDTFを整備中である。その内インド太平洋に3個、欧州兼ねてアフリカに1個を配備し、1個を戦略予備として米国内に控置する計画である。インド太平洋を重視する姿勢に疑問を挟む余地はなく、第一列島線国に配備されるのは間違いなからう。

今般、「レゾリュート・ドラゴン25」に参加するのは、ハワイ州スコフィールド兵舎に配置されている第3MDTFのMRC（タイフォン）である。

タイフォンは、2024年4月の米比合同「バリカタ」演習中に初めてフィリピンに展開した。その後、タイフォンは同国に残置され、米国はフィリピンからタイフォンを撤退させる予定はないと表明している。また、フィリピンはタイフォン導入を検討しているとも伝えられている。

他方、米陸軍はオーストラリアで行われた「タリスマン・セイバー25」演習の一環として、夏にタイフォンの実弾射撃演習を実施し、海上目標を撃沈することに成功した。これは西太平洋で陸上配備型MRCが発射された初めてのケースであり、米軍の陸上配備型海上攻撃能力の開発と運用における重要な節目となった。

いずれのケースでも、中国はこの動きを批判し、地域の不安定化を招く可能性があると警告している。

こうした反応を見るにつけ、タイフォンの展開は、PrSMやLRHWの開発と相俟って、インド太平洋地域における抑止の向上に大きく貢献していることが伺える。

○紛争の抑止効果を一段と高めよ

米海兵隊は、遠征前進基地作戦（EABO）構想の下、第一列島線国周辺の島嶼等に機動展開し、海洋打撃ミサイル（NMESIS）や高機動ロケット砲システム（HIMARS）などの対艦ミサイルをもって500km以内の敵艦艇を撃破し、制海（SC）・海洋拒否（SD）の獲得維持に寄与する作戦を準備している。

海兵隊は短距離、陸軍は中距離を担当し、相互に重複を避けつつ、役割分担・棲み分けを行っている点にも注目したい。

米海空軍にとっても、長距離精密攻撃能力の向上は大きな課題である。両軍の作戦構想は、日米などで構成される第一列島線に沿った対艦・対空ミサイルの掩護下に、それをバリアーとして太平洋側から長距離精密攻撃能力を発揮する構えであり、その能力向上に注力している。

わが国自衛隊も、島嶼防衛用高速滑空弾および12式地対艦誘導弾能力向上型の開発、トマホークの導入などによるスタンド・オフ防衛能力や、イージス・システム搭載艦そしてSPY-7レーダーアレイの導入などによる統合防空ミサイル防衛能力の向上に努めている。

る。また、無人アセット（UAV・USV・UUV）による多層的沿岸防衛体制「SHIELD（Synchronized, Hybrid, Integrated and Enhanced Littoral Defense）」の構築に着手している。

平たく言うと、紛争の抑止のためには、①敵の侵略を撃退するに十分な戦力を持つこと、②その戦力を使用する用意があること、そして ③相手（敵）に対して我が不退転の決意を悟らせることの３要件が不可欠である。

その主旨から、日米共同演習をはじめ、友好国・関係国との訓練演習を積極的に公表し、目に見える形で紛争抑止の３要件を明示し、相手（敵）に深刻に認識させることが極めて重要であり、抑止の実効性を高める上で必須である。

抑止、抑止と言うは易いが、侵略を意図している国に対しては、侵略によって得られる利益よりも損失の方が大きいと現実的に受け止め、断念させない限り抑止は成り立たないのである。